

近世実録における大塩平八郎の人物像

荻原大地

一 はじめに

大塩平八郎について、ほとんどの現代人は、民衆を救うために反乱を起こした人物と考えるに違いない。森鷗外が『大塩平八郎』〔附録〕で「平八郎は天保七年に米価の騰貴した最中に陰謀を企てて、八年二月に事を挙げた。貧民の身方になつて、官吏と富豪とに反抗したのである」⁽¹⁾と述べたように、大塩を貧民の味方と位置づける評価は、広く浸透したものである。

一方、江戸時代に流通した大塩を主人公とする近世実録（大塩平八郎物実録、以下「大塩物実録」と略す）を見てみると、彼は必ずしも民衆を救う英雄として、好意的に描かれているわけではない。それどころか、彼を残酷非道な人物として描く作品さえ存在する。つまり、大塩平八郎に対して、近世期の人々が抱いたイメージと、近代以降の人々が抱くイメージの間には、大きな相違が存在するのである。

しかし、大塩物実録の諸本が十分に把握されていなかったため、大

塩物実録の具体的な内容や、そこに描かれた大塩平八郎の人物像が研究の俎上に載ることはなく、近世期の人々が抱いた大塩平八郎のイメージを知ることが難しかった。

そんな中、稿者は大塩物実録の諸本について、記録類↓浪花筆記（群）と、記録類↓『太平鑑』↓『天保浪花噺』・『天保太平記』という二つの系統が存在する一方で、これらの系統とは独立した『新編天保太平記』が存在すると明らかにした⁽²⁾。本稿では、大塩物実録が発展するにつれて、大塩個人に関する脚色が増えていく様子に注目し、それぞれの作品に見られる特徴について言及したい。

一 史実と実録作品化

考察の前に、大塩の乱と大塩物実録の概略を示しておきたい。大塩の史実については、『大塩平八郎書簡の研究』〔年譜⁽³⁾〕が詳しい。『年譜』に記載された大塩の乱に関する史実をまとめると、次の通りである。

天保八年、大塩平八郎は、町奉行の市中巡見に合わせて拳兵し、彼

らを討ち取り、豪商から金銭米穀を奪い救民に施す蜂起計画を決定する。計画に合わせて大塩は蔵書を全て売り払い、窮民に施行する。しかし、平山助次郎の密訴によって計画が露頭。縛吏に小泉淵次郎は斬られ、瀬田清之助は大塩に露頭を告げる。大塩は蜂起を諫めた宇津木を大井正一郎に斬殺させた後、ついに蜂起する。しかしわずか一日で鎮圧され、大塩は息子の格之助とともに自害した。

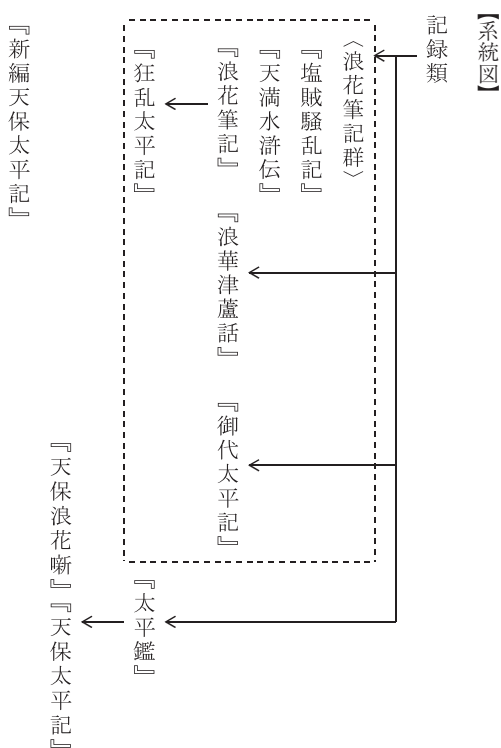
この史実を踏まえて生まれたのが大塩物実録である。大塩物実録の諸本やその発展の詳細については別稿に譲り、本稿では系統図と簡潔な説明を記したい。

大塩物実録は、大きく分けて記録類↓〈浪花筆記群〉／記録類↓『太平鑑』の流れが存在する。〈浪花筆記群〉は、大塩の乱の顛末に大塩の与力時代の活躍を増補するという筋書きを共有しているが、個々の作品は、序文の特徴からさらに区分することができる。『塩賊騒乱記』『天満水滸伝』『浪花筆記』はいずれも共通した序文を持つが、『狂乱太平記』はその序文を本文中に取り込んで、新たな序文を附している。また、『浪華津蘆話』と『御代太平記』はこれらの作品とは異なる序文を持ち、さらに両作品の序文も異なっている。この〈浪花筆記群〉の序文は、各々の作品を特徴付けるものであり、次節で詳しく検討したい。

一方、『太平鑑』は〈浪花筆記群〉と異なり、序文を持たず、与力時代の活躍ではなく、大塩が父親から勘当される物語を増補した筋書きを持つ。この『太平鑑』に、大塩の出生やキリシタン捕縛の物語を

増補して成立したのが、『天保浪花噺』『天保太平記』である。また、〈浪花筆記群〉や『太平鑑』と無関係に成立したと思われる『新編天保太平記』が存在する。

以上が、大塩物実録の全体像である。この大塩物実録の中で、大塩はどのような人物として描かれたのか。



二 批判的評価 ―〔浪花筆記群〕―

まず、大塩物実録のうち（浪花筆記群）に属する『浪花筆記』、『狂乱太平記』、『浪華津蘆話』、『御代太平記』を見てみたい。これらの作品は、まだ大塩個人に物語の焦点を当てておらず、彼の人物像と言えほどの具体的な物語や記述は見られない。だが、各作品の序文に注目してみると、大塩の乱に対して、おおむね否定的な評価を下している。以下、各作品の序文を引用する。

惟天保八丁酉年二月十九日、浪花に一珍事あり。辰の下刻になん、所は天満より出火し頃刻に数町が間に延焼して、炎々として餘煙天にわたり、日光はかすむ風泊の怒もなきに、斯大火となるは如何成。悪火天災ならんと思ふ内に誰いふともなく、天満に反逆人有て火器を車にのせ、鉄砲を放ち、奉行所を責る故、御城代へ加勢をはるなんと浮説一ならず。（中略）其珍事の起本を尋に、天魔組与力大塩格之助、父隠居平八郎と言者、頗る聞人にして常に文を講じ、武を陳じて人師とあをがる。一世を非として常に朝政を誹謗す。申年の飢渴に窮民寒にせまり。往々餓死するをいたり、彼浪花には天下の巨豪数多有由へ、是が旧跡を過分に出さしめ、窮民を救はん事を上書せしに、廢して用ひられず。爰において独憤怒して蔵書数万卷をうりて金六百万両にかへて、一万人に一朱つ、ほどこし、当春にいたりて京都倍々江府を米価いよく苦し

近世実録における大塩平八郎の人物像（萩原）

き方々運転つゝかず、大坂へしめして米穀数万を廻米せしむ。大塩倍々いきどおり、是奉行諸役人の私曲不仁なり。京都へ米をかぎりて送り、江戸へは米穀を廻米せしむ。唯極民のみを救ふて百姓の死亡をあわれまず。我湯武の位、孔孟の徳なけれども、是に比して下民をなやます諸役人を誅伐し、蕩の豪商を懸害して貯へ置る金銀米銭を取て窮民に施さんとて、一類門弟をかたらひ、悪謀を企るに一味の内、平山が忠節により事発覚におよび、斗謀左違せしかども火器を以て大坂天満より火を放ち、数十町を放火し、巨豪数百をこぼち、其財宝やきうしなひ、暫く乱妨すといへども、南町奉行出事なりて、玉造組の鉄砲に打くだかれ散乱して、残党ことく追捕せられ、或は自尽す。（『浪花筆記』⁵）

爰に大塩といへるものの所業なり。去し文政の頃、公厥に仕へて、頗る怨念にさかく、虐吏を正し、邪念を戮し、累年震蘭に似たる。証を速に明晰して片言以て訟を定め、子略にもはぢざるいさおしなりしに、退隱の後、暗に慢心を生じ、公政を誹謗し、党を構、五穀不熟の期を考へ、蔵書を却して其価を貧民に与ふ事を名とし、人望を計、近在へ檄文を散じて農人を集め、暴に起て火砲を放、市塵を焼、是がために、産業を廢する者少なからず。彼漢王亡国のとき、赤眉黄巾の乱の賊に似たり。然ども金職の武備隣国唐の守衛公の全速にして乱妨を征す。就中、坂本氏の一炮は能悪党を鎮むるに足れり。後朝の町家に隠忍ぶといへども、天網を

のがれず、終に自殺す。（『狂乱太平記』⁶）

其位にあらざれば、其政を斗らずと。爰に大塩某は飢渴の窮民をすくわんと惻隱のころろつりしにや、届かぬ存意も癩癩の一旦おこりて乱妨と変化せし。夫迄のおこなひは賞すべし。亦乱妨の所行はにくむべし。（『浪華津蘆話』⁷）

抑天保の動乱まさに中華大明の末に賊徒たりし李自成といふもの、徒党を聚て国郡を攻掠勢い次第に強大にして、終に洛陽攻陥し福王を殺、其血を取て鹿肉をあえて食ひ、是を福録酒と名、王府を焼、米金を散じて飢饉の貧民に賑みしといふ事あり。今度の企も十分に相整ものならば李自成の所行に類し申べくに、却て自が心には殷湯王周武王の義戦に類し、救民など唱へしは前後不都合全狂慢の所為ならん。（『御代太平記』⁸）

それぞれの序文について、詳しく見ていきたい。

『浪花筆記』の序文は、大塩平八郎の乱の発端から結末までを概観し、その中で、大塩の謀反を「悪謀」と称する一方で、謀叛の計画を密告した平山助次郎を「忠節」と称している。この『浪花筆記』から発展した『狂乱太平記』の序文では、大塩平八郎の乱を「彼漢王亡国のとき、赤眉黄巾の乱の賊に似たり」となぞらえ、鎮圧に活躍した坂本鉉之助を「唐の守衛公」（『唐の李靖。秦王李世民の幕下にあつて、

国内の平定に武功をあげ、李勣とともに唐一代の名将と称えられた）に例えている。『浪花筆記』『狂乱太平記』はいずれも大塩の乱を批判的に評価し、鎮圧者側を高く評価している。

『浪華津蘆話』の序文は、大塩の乱の原因を「爰に大塩某は飢渴の窮民をすくわんと惻隱のころろつりしにや、届かぬ存意も癩癩の一旦おこりて乱妨と変化せし」とまとめ、大塩平八郎の抱いた窮民を救おうという志が周囲に理解されず、癩癩を起こした結果が大塩の乱であると評する。そして、乱以前と以後を比較し、大塩を「夫迄のおこなひは賞すべし。亦乱妨の所行はにくむべし」と評している。『浪華津蘆話』の序文は、大塩を功罪相半ばする人物とする点に大きな特徴がある。

『御代太平記』の序文は、大塩の乱を明末の李自成の乱と同一視し、「却て自が心には殷湯王周武王の義戦に類し、救民など唱へしは、前後不都合全狂慢の所為ならん」と手厳しく非難している。大塩と李自成を結びつけている点は、当時の大塩に対するイメージだけでなく、海外の出来事と国内の出来事を結びつける発想がうかがえて興味深いものである。

以上のように、大塩物実録のうち、比較的早くに成立した（浪花筆記群）の序文を見ると、大塩の乱に対して、否定的な評価が下されている。さらに、『御代太平記』『狂乱太平記』のように、大塩を中国の反乱者と同じ視するといった形で、彼個人を批判的に捉える傾向も看取できる。すなわち、大塩物実録は当初、大塩の行動や彼個人に批判

的であったとまとめられる。

この〈浪花筆記群〉の後、大塩物実録は大塩個人に関する脚色が増えていく。その方向性としては、大塩を賞賛する物語を増補するものと、大塩の残虐性を示す物語を増補するものの二種類が見られる。

三 英雄から反逆者へ

―『天保浪花噺』『天保太平記』―

大塩を賞賛する物語が増補される特徴は『天保浪花噺』⁽¹⁰⁾『天保太平記』⁽¹¹⁾に顕著である。『天保浪花噺』には「明治二己巳正月日」と書写年時があり、『天保太平記』（五巻一冊、国立国会図書館本）には「明治十年交換」の印が押してあり、両作品はいずれも幕末・明治初年頃の成立と思われる。また、両者の物語の内容は同一のものである。

この両作品は『太平鑑』から発展した作品であるが、『太平鑑』には、〈浪花筆記群〉で見られた序文が一切見られず、大塩に関わる物語の増補も見られないため、大塩平八郎の乱や大塩への評価は全く読み取れない。しかし、『太平鑑』が『天保浪花噺』・『天保太平記』に発展する過程で、大塩の若年期の物語が増補され、彼個人を賞賛する物語が色濃く出現するのである。

以下、『天保浪花噺』を例にして、物語の流れを確認しつつ、作中で大塩がどのような人物として描かれているかを追ってみよう。

『天保浪花噺』は大塩の出生から物語を説き起す。作品冒頭で、大塩平八郎を「駿遠三に威を振り給ひし今川治部大輔義元の末孫な

り」と今川義元の末裔と設定し、大塩の父の代に至って、大坂町奉行の与力となったとする。さらに、大塩の父は子供ができないことに悩んでいたが、京都の阿弥陀ヶ峰にある豊国大明神に参詣したところ、ようやく子供を授かり、「神祖の御詞にも、我が為の八幡なりと申給ひしは、本多平八郎忠勝君なり。此小児生長の上、忠勇本多君にあやかる様にと平八郎と名付」けたと語るのである。（以上、「大塩平八郎出生の事 附江戸表え学問修行の事」）

このように、『天保浪花噺』は大塩を日本史上の著名な人物と結びつけようとする姿勢がうかがえる。この姿勢の背後には、実録の主人公を一般人とは異なる存在として差別化する意識が働いていると思われる。同様の傾向は複数の実録作品に見出せる傾向であり⁽¹²⁾、実録の物語増補の一つのパターンと考えられる。『天保浪花噺』は、このパターンを利用して大塩の前半生の脚色を試みたのであろう。

また、『天保浪花噺』以前の作品には、大塩を賞賛する記述は全くなかったが、本作にいたって、いかに大塩が賞賛に値する人物であるかを、具体的に示す物語が出現する。

まず、「大塩平八郎出生の事 附江戸表え学問修行の事」では、大塩は「三四才の頃分その智、衆に越、一を聞て万を知るの才有。八九才の頃には大人も及ざる程にて書物を好んで和漢の書に眼をさらし、また暇ある打は武術を学ばしむるに、其妙を究ずと云事なし」と神童ぶりを見せ、「近隣こぞって平八郎が奇才を感じあへり」と賞賛される。

続く「鈴鹿の山中にて平八郎賊に逢ふ事」では、鈴鹿山を通り過ぎようとする大塩平八郎の前に山賊二人が立ちはだかる。大塩は「扱は汝ら旅人と見せかけ往来の人をなやます山賊なるや。我も両刀たばさみ、汝らごときに手込にあはんや。あたら命を落さんより、とくく道の案内をせよ」と応じるが、山賊は逆上して大塩平八郎に襲いかかる。大塩は一人を「目早く其手をとらへねち上て引かつき、はるかの谷へ打込」、もう一人は「刀の下緒を以しかと引く、り、かたへの松にぞしぱり付」て教訓し、「落たる刀を拾ひ取、彼賊がたぶさを根より切すて、、足早に元来し道へ引かへす」のであった。そして、「後に此事を僕に噺せしに、舌を巻て恐れける」と結ばれる。

これらの物語では、大塩が学問だけでなく武勇面でも勝れた、文武両道の人物として賞賛されており、これらの物語から、『天保浪花噺』は大塩を文武両道の人物として造形しようと試みていることがうかがえる。

さらに「大塩平八郎学問修行の事 附吉原町遊所へ誘引る、事」では、「平生平八郎が学文に長じ、師の覚よきを心憎し」と思った書生仲間によって、無理矢理、吉原町の松葉屋へ入ることとなる。書生たちは泥酔するが、大塩は「始終座を崩さず、床に入るといへども勝手なりとて、灯火の下に矢立を取出し、懐紙に何やらん物書して敢て女郎と言葉も交わさ」なかった。その後、書生仲間は揚げ代を払えなかったため、大塩を置き去りにしてしまう。難儀した大塩は林大学頭のもとへ戻り、先ほどの懐紙とを差し出して、林大学頭に揚げ代の支

払いを依頼する。この懐紙には、遊里にいる間に書き留めた漢詩が書かれており、林大学頭は色香に迷わなかった大塩に免じて、揚げ代を支払った。書生仲間は「平八郎が其身に引受友の悪事を云ず、大学頭殿の前にて更に臆する気色もなく、明らかに答しさま、又遊里に有て心を奪はれず、詩を作りて楽しみ居さま、凡人の所為にあらずと大に恥感じて、罪を謝しける」が、当の大塩は「更に怒る気色もなく、弥怠慢なく学業を励みけるとなり」という様子であった。

右の物語には、大塩に対する具体的な賞賛の言葉は書かれていないが、彼の機転の鋭さと度量の広さを象徴する物語となっている。似たような物語は、大塩の与力時代の活躍にも及んでいる。

「大塩平八郎町与力相勤る事 附切支丹宗門水野軍記が事」「大塩平八郎邪家の者見頭す事 附夫々仕置の事」は、大塩がキリシタンの水野軍記と豊田貢を捕縛して処罰する物語である。大塩は「万事正直にして曲れる事なく、上なる者の差凶にても利に違ふ事あれば、決して承引せず、公事訴訟の事に至りては是非明弁にして」「善悪分明なりしかば、町家の者共、其徳を慕」われていた。そんな中、水野軍記という者が稲荷大明神と号して「切支丹宗門の邪法」を行って金銀を溜め込み、水野軍記の病死後は、豊田貢が後継者となっていた。大塩は豊田貢を捕縛して磔刑に処し、水野軍記の墓を掘り出して、その骸骨を晒した。この大塩平八郎の活躍は「皆、平八郎が明智よりあらはれ、邪宗の者共伏誅せりと、人々皆感じ思ひけり」と賞賛される。大塩が水野軍記の墓を暴く部分は、何らかの批判があつていいように思われ

るが、あくまでも「人々皆感じ思ひけり」と賞賛されるのである。

ここまで、『天保浪花噺』における大塩の若年期の物語を概観してきたが、この時点までは一貫して、大塩を賞賛に値する英雄的な活躍をする人物として描いている。これは、(浪花筆記群)の大塩に対する否定的評価とは全く逆の評価である。

だが、この大塩の英雄的な人物像は、「貢が怨恨に依て怪異の事」という物語以降、全く見られなくなってしまう。この物語では、「大塩平八郎が家に種々の怪異の事始れり。雨など降夜は家の棟にて老姥のかなしむ声し、或は火の玉家内にころげなどし、又夜中女子共老姥の立る姿を見しなど、怪敷事共多けれど、平八郎が武勇にや恐れけん、更に右の事共を知らず」と豊田貢の祟りが起こり、それ以降、大塩は「何となく心荒々敷なり」、「町家富有の輩武士の貧窮を見下し、武臣に対して失礼の事而已多し」「大坂御城は日本の固めたるに女童に等しき輩をして守らしむ。是を乗取、天下の勢を引請、華々敷腹かき切て死せんには、武臣の励み、諸侍の気を引立る基ひならん。天下に對し、不忠に以て却て武家の心を励す忠儀の所ならん」と世間への不満をつのらせ、反乱蜂起を企てていく。その後、大塩は林家の名前を語った無尽講で軍用金を集めたり、仙石騷動の首謀者である仙石左京を仲間に取り入れようと試みたりといった反乱への準備を進めていく。

このように、『天保浪花噺』「貢が怨恨に依て怪異の事」は、大塩が英雄から反逆者へと変わる転換点となっており、これ以降、大塩を賞

賛する内容や記述は姿を消してしまうのである。

『天保浪花噺』の物語展開をまとめると、大塩は若かりし頃、周囲の賞賛を集める文武両道の人物であったが、水野軍記や豊田貢といったキリシタンを取り締まったことが転機となり、反逆者へと転落していくという大きな流れが見出せる。『天保浪花噺』・『天保太平記』の特徴は、大塩を英雄から反逆者へと墮ちた人物として描く点にある。

四 残虐な反逆者 — 『新編天保太平記』 —

前節では、『天保浪花噺』・『天保太平記』における大塩の人物像が、英雄から反逆者へと変遷していることを指摘した。これに対して、一貫して大塩を残虐な反逆者として描く作品が存在する。それが『新編天保太平記』¹³⁾である。『新編天保太平記』も『天保浪花噺』・『天保太平記』同様、大塩の若年期の物語が描かれるが、その内容は全く異なり、大塩がいかに残虐な人物であるかを描く点に注力しているのである。

『新編天保太平記』冒頭の「大塩平八郎素性 并得正宗話」で、大塩平八郎は「昔より今に至るまで逆意を企て、其終りを善せし者は和漢ともに未だ是あらず。然るに去ぬる天保八丁酉年二月十九日、及がたき逆謀を企、大坂市中を放火乱妨し、浅間しく自滅して屍を嚴科に行はれ、禍を九族に及ぼし、悪名を末代に遺せし大坂東組与力大塩格之助なる者の養父、当時隠居大塩平八郎」と紹介される。そして、「自ら今川義元の末葉なる由、自負せり。生得大胆剛氣にて劍法槍術を好み、又陽明学に眼を肆し、稍文才も有ければ、世人も是を誉、其身も

己が才を恃で、人を直下し短慮殺伐の行条多し。」と記述される。本作において、大塩は自らの才能をひけらかし、他人を見下し、短慮殺伐の行動が多い人物と設定されており、『新編天保太平記』が当初から、大塩平八郎を残酷な反逆者と位置づけていることは明確である。

続く「大塩平八郎素性 并得正宗話」では、大塩が鼈（すっぽん）を調理する物語と、正宗の刀を入手する物語の二つが内包されているが、いずれも前述の設定を具体化する物語となっている。以下、梗概を示す。

大塩は近藤氏と交友を結んでいたが、ある時、近藤氏は大塩に鼈を調理してみせよと戯れる。平八郎は迷惑に思い、「我いまだ鼈を庖丁せし事なし。此儀は宥免に預りたし」と辞退するが、近藤氏はその姿を「汝は武士ならずや。武士ならば時宜に依て人をも切べし。況や鼈を切を恐るゝ事やある。但し、鼈を切が怖しきや」と嘲笑する。すると、「短慮の平八郎、中に憤り」、大小交えて二十匹ほどの鼈を料理しようとして、組板の前に座る。近藤は当初、「庖丁とて別にあらず。汝が刀にて料理せよ」と言うが、大塩が「我大小は鼈を切ん為には帯せず。人を切為の大小なり。刀にて料理すべくば、足下の指料を借給へ。それにて料理すべし」と応じたため、近藤氏は家来の刀を差し出す。大塩は「其刀を抜持、鼈を俎の上へ掴み、上甲も放さず、滅多切に甲ぐるめに散々に切碎き、終に二十余枚の鼈を切ければ、刀は鋸のごとく成にける」と、鼈を滅多切りにしてしまう。その後、大塩は「此外、手あらしき動止時々有しにより、奉行職の人にも格別寒立し、役向には

用ひられざりし」という様子だった。

この鼈を調理する話は、「滅多切に甲ぐるめに散々に切碎き」「刀は鋸のごとく成にける」「此外、手あらしき動止時々有し」といった言葉に象徴されるように、大塩の気性の荒さを具体的に示す物語となっている。

そして、この大塩の気性の荒さは、正宗の刀を入手する物語によって、さらに強調される。こちらも以下に梗概を示す。

ある藩の武士は無名正宗の刀を所持していたが、祖父から二代の間、よからぬ事があつて横死したため、この刀の崇りでないかと疑い、易者に占わせると「是全く刀劍の崇のなす処なり」と言われたため、「偕は祖父の代に買求し、正宗の刀の崇なるべしとて、件の刀を大いに忌恐れ、望みの人あらば無料にて譲与ふべしと言触」れる。この話を聞いた山城守は「さる崇ある刀は好よしからず」と考えるが、そこに居合わせた大塩は正宗の刀を所望する。山城守は大塩平八郎を制して、「汝は武を好む事、人に過たれば崇りを得たくおもふは一理あれども、身に崇る刀は求て益なからずや」と忠告する。ところが、大塩は、「否、左様にては候はず。莫耶の劍も持人に依と申せり。武士たる者望名作を帯してこそ、まさかの時の用には立候。何卒刀の崇るななどの義あらんや。然れども、名作も臆病未練の者所持すれば、鈍劍にひとしく、名作も其持主を疎みて崇る事も候べし。此平八などは崇る程の名作ならでは、指料とするに不足候」と応じる。

大塩平八郎は正宗の刀を譲り受けると、「件の刀を磨せて是を見る

に、誠に物凄ばかりの出来物なれば、大いに悦び、江戸の本阿弥に目利を頼みつかはしけるに、正宗に相違なく、金五拾枚の値ありといひ越しけるにぞ、益喜悦」する。そして、「来る人に見せ誇りて秘蔵しけるが、是より慢心弥増長し、手荒の拳動以前に十倍しければ、東西組の与力同心、平八郎の門人の外は忌憎まぬ者もなく、家門の妻子小者下婢までも狂気せられしやと思ふ程のも度くありしとかや」と、周囲から忌み嫌われるようになり、「是彼正宗の崇ならめと潜に耳語とあふ人も有けるとぞ聞えし」と噂される。

右の物語のうち、大塩の「何卒刀の崇るなどの義あらんや。然れども、名作も臆病未練の者所持すれば、鈍剣にひとしく、名作も其持主を疎みて崇る事も候べし。此平八などは崇る程の名作ならでは、指料とするに不足候」という台詞は、大塩の傲慢さを際立たせる台詞であり、この正宗の刀を入手して以降、「慢心弥増長し、手荒の拳動以前に十倍しければ、東西組の与力同心、平八郎の門人の外は忌憎まぬ者もなく」といった状況が生まれ、「是彼正宗の崇ならめ」と噂されたと云う。

「大塩平八郎素性 并得正宗話」における龜の話と正宗の刀の話は、いずれも大塩の気質の荒さや傲慢ぶりを具体的に描く物語であり、この一話を通じて、当初から荒かった大塩の気質が、正宗の刀を入手して以降、さらに増幅していく様子が描かれている。『新編天保太平記』において、大塩が賞賛に値する人物としてではなく、むしろ非難に値する人物として描かれていることは、この一話からも十分読み取るこ

とができよう。

さらに、「平八郎陰謀施行落文 并宇津木矩之助の話」「大井正一郎討宇津木 并大塩出陣放火の話」の二話は、大塩の残虐性をより際立たせる物語である。

宇津木矩之助は「武術儒学稽古の為、平八郎の門人となり、邸に寄宿して居ける」が、大塩に謀反計画への参加を促され、「矩之助は容易ならざる義と恐ろしく思ひ、有無の返答もせず、透問あらず逃帰らんと考」える。すると、大塩平八郎は見張りを付けて、宇津木を監禁してしまふ。その上、謀反計画に異議を唱える河合郷左衛門に対して、「短慮の平八郎、大に憤り、大杖を以て河合を散々に撃懲しめけるにぞ、郷左衛門再び口を開く事能わず」と暴行を加え、吉見九郎右衛門の息子英九郎を「決して親元へ叛さず、宇津木同様に目代を付、邸より外え出さざれば、吉見は人質をとられ、子の愛着にほだされて訴人もなし得ず、あやぶみ居たりけるとなん」と人質にすることで、吉見九郎右衛門の離反を防ぐ。そして、このような卑劣な手段を執るばかりか、最終的には宇津木を殺害してしまふ。

彼の宇津木矩之助を呼出し、座に着しめ、「今已に出陣の期来けり。其方も覚期を極め、ともに出陣すべし」とて盃をさしければ、宇津木は生たる心地なくさし俯首で、返答しかねけるを、一座の輩口々に勧め、強て盃を受させけるにぞ已事を得ず、盃とり上て一二盞飲、手水心とて座をたち庭え下て小用しはて手水鉢にか、り手を清め居けるに、平八郎、大井正一郎に屹と目語しければ、

正一郎心得、有あふ手槍おつ取、庭え飛下、詞をも懸ず、矩之助が脇腹を一槍に突通しけるにぞ、苦と叫び悶くるしむを正一郎槍引抜て止を刺けるぞ無残なる。斯て正一郎座に帰りければ、平八郎血祭よしとて盃を正一郎にあたへけり。

大塩は、宇津木敬治が謀反に参加しないことを悟るや否や、大井正一郎に命じて、宇津木を殺害させ、それを「血祭よし」として祝う。

この物語は、大塩が宇津木を殺害させた史実を踏まえて、大塩の残虐性を強調する物語へと脚色したものであろう。

「平八郎陰謀施行落文 并宇津木矩之介の話」「大井正一郎討宇津木并大塩出陣放火の話」はいずれも、自分の意に反する人間に対して、暴行監禁、殺害も辞さないほどの残虐性を持つ人物として、大塩を描き出している。一連の物語を見れば分かるように、『新編天保太平記』における大塩は、一貫して粗暴で残虐な反逆者であった。これほどまでに大塩を否定的に描く実録作品は存在せず、『新編天保太平記』は、大塩の反逆者としての側面を強調して描いた作品と位置づけられる。

五 おわりに

本稿では、大塩物実録が発展するにつれて、作品ごとにどのような特徴が現れるのかを概観した。その結果、大塩物実録は大塩平八郎を反逆者と位置づける認識を共有しつつも、〈浪花筆記群〉は序文で大塩やその行動を批判的に評価するに留まり、『天保浪花噺』『天保太平記』は大塩平八郎を英雄から反逆者になった落差のある人物として描

き、『新編天保太平記』は一貫して粗暴で残虐な反逆者として描くといった特徴を見出すことができた。大塩物実録は発展することに、大塩個人に関する脚色が増えていく傾向にあり、この傾向に従って、各作品の特徴が出現したものと考えられる。

注1 『大塩平八郎』「附録」〔森林太郎『鷗外全集』第十五巻、岩波書店、一九七三年一月、七十三頁〕

(2) 荻原大地「大塩平八郎物実録の展開とその受容」〔『近世文芸』百十二号、日本近世文学会、二〇二〇年七月〕

(3) 相蘇一弘「大塩平八郎書簡の研究」第三冊（清文堂、二〇〇三年十月、二二〇九頁～二二五七頁）

(4) 先掲(2)

(5) 本文引用は、大阪府立中之島図書館本（十巻六冊、天保八年序）に拠る。ほかに、大阪市立図書館本A（十一巻三冊）、大阪市立図書館本B（一巻一冊）がある。

(6) 本文引用は、東京大学付属総合図書館本（五巻五冊、嘉永二年写）に拠る。

(7) 本文引用は、国立国会図書館本（二十巻五冊、天保八年写）に拠る。ほかに、筑波大学中央図書館本（十巻五冊、天保八年写）がある。

(8) 本文引用は、国立国会図書館本（十巻五冊、書写年不明）に拠る。

(9) 岩波書店辞典編集部編『岩波世界人名大辞典』第二分冊「李靖」（岩波書店、二〇一三年十二月、三二二頁）

(10) 本文引用は、大阪市立図書館本（五巻二冊）に拠る。

(11) 本文引用は、国立国会図書館本（五巻一冊）に拠る。

(12) 例えば、佐倉惣五郎物実録において、佐倉惣五郎の先祖を朱雀院の皇女松虫姫に付き従った武士と設定したり（『佐倉花実物語』）、由井正雪物実録において、由井正雪を武田信玄の生まれ変わりとして設定したりする（『慶安太平記』）といった例が挙げられる。

(13) 国文学研究資料館三井文庫旧蔵資料。閲覧および本文引用は、国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」に拠った。

※本稿は科学研究費補助金（特別研究員奨励費 課題番号：19J11736）による成果の一部である。